

Japan Society of  
The Graded Direct Method  
and Basic English

# Year Book

No.76

内 容

---

時に関する表現の指導 -GDM を活用した実践とその成果-

松浦克己 2

GDM によるオンライン英語教育の実践と展望

合川麻由 12

聖書言語の意味解釈

～ BBE (*The Bible in Basic English*)版を範として(1)～

後藤 寛 21

Basic English と身体

相沢佳子 33

支部活動報告(東日本支部&西日本支部)

41

---

発行:GDM 英語教授法研究会/日本ベーシック・イングリッシュ協会

編集:山崎典子

東日本支部事務局 E-mail:info-e@gdm-japan.net

西日本支部事務局 E-mail:info-w@gdm-japan.net

<http://www.gdm-japan.net/>

## 時に関する表現の指導 ーGDMを活用した実践とその成果ー

松浦克己

### はじめに

中学校で学習する文法事項で、じゅうぶんに定着させることができないことの一つとして「時に関する表現」が挙げられる。これは現場の教師は誰もが感じていることであり、また実際に2018年、2023年に実施された全国学力調査の結果からも明らかになっている。2018年の問題については、Year Book No.72 と『GDMで英語の授業が変わる』の第3章で詳しく述べている。

2018年の問題は、与えられた情報からその人物を説明する英文を書くといった内容だった。その情報は次のようなものである。

① 出身 … Australia ② 住んでいる都市 … Rome ③ ペットの有無 … ×  
以上のように示され、その英文と正答率は以下のものであった。

① She is from Australia. She comes from Australia. 54.2%

② She lives in Rome. 33.7%

③ She doesn't have any pets. She has no pets. She doesn't have a pet. 38.3%

また、「休み明けに教室で」という場面での次の会話が成り立つように( )の中の語を使って文を作るという問題で、

A: Was your vacation good?

B: Yes. My family and I went to Australia. ( stay ) there for two weeks.

B: Wow. Wonderful.

全国の正答率は29.5%で、We stayed と答えたのが20.5%、I stayed が9.0%という結果だった。2023年の調査で「時に関する表現」の問題は次のようなものであった。

<先生と生徒の会話>

A: Do you have any plans for summer vacation?

B: Yes. I ( visit ) my uncle in London. I can't wait!

A: Wow, that's nice! 全国の正答率 … I am going to / I will 40.4%

以上の結果から、中学3年4月の段階で、「時に関する表現」が理解できているのは約3分の1と言える。中学生全員が使っている検定教科書で、「時に関する表現」がどのように扱われているかを明らかにし、どこにこのような結果になる原因があるのか、そしてそれに対してGDMを取り入れることにどのようなメリットがあるのかを見ていきたい。

### 1 検定教科書における「時に関する表現」の指導順序

検定教科書で、「時に関する表現」はどのような順序で指導するように配列されているかをまとめると次のようになる。

< 2020 年度までの多くの検定教科書 >

1 年 ① be 動詞 ② 一般動詞現在形 1, 2 人称 ③ 一般動詞現在形 3 人称

④ 現在進行形 ⑤ 過去形 ⑥ 過去進行形

2 年 ⑦ 未来 3 年 ⑧ 現在完了形

< 2021 年度からの検定教科書 >

1 年 ① be 動詞、一般動詞現在形 1, 2 人称 ② 一般動詞現在形 3 人称 ③ 現在進行形

④ 過去形 ⑤ 過去進行形

2 年 ⑥ 未来 3 年 ⑦ 現在完了形 ⑧ 現在完了進行形

小学校での英語の教科化の影響で、①と②が最初から一緒に出てくるようになった。New Horizon や New Crown では 1 ページ目で I am Meg Brown. と I like Japanese food. を一緒に教える。Here We Go! では 1 ページ目で I am Eri. 2 ページ目で I like spring. を教えるといった細かな違いはあるが、基本的には小学校の復習事項という考え方で be 動詞と一般動詞を一緒に教える。現在進行形と過去形の順序については、過去形を先に教えるものもある。また多くの検定教科書で 2 年の最初の指導事項になっている⑥未来を、New Crown では 1 年の指導事項としている。以上のような指導順序にはどんな問題点があるのだろうか。

## 2 問題点

### (1) 一般動詞 1, 2 人称と 3 人称の導入のタイムラグ

2020 年までの教科書では、5 月下旬に一般動詞 1, 2 人称を、そして 10 月に 3 人称を学習する。約 5 か月のタイムラグがあったが、現行の教科書では、そのタイムラグがさらに長くなっている。各教科書で 3 人称が出てくるページ数／総ページ数(巻末の資料を除く)を表すと次のようになる。

New Horizon 58／128 ページ

New Crown 69／147 ページ

Here We Go! 84／150 ページ

このように 1 年生のほぼ前半は 1, 2 人称だけの学習となっている。小学校の学習を加えれば、2 年 6 か月のあいだ、一般動詞の現在形の文は 1, 2 人称しか扱わないというのが、今の日本の入門期における英語教育の一面である。私は・・・に住んでいます。メグの姉は( She )・・・に住んでいます。このように 1, 2 人称と 3 人称で動詞を使い分ける必要のない日本語を母語とする生徒が、3 人称を学習するタイムラグが今までよりも長くなれば、2018 年の学力調査での

She lives in Rome. の 33.7%の正答率(前ページ参照)が悪くなると推測するのが、他の条件が同じであれば自然だと思われる。

また、多くの教科書では一般動詞の 3 人称単数現在、いわゆる「3 単現」を新しい文法規則のように扱っている。英語の動詞のルールは is / am / are の使い分けより細かな分類はないし、また別の観点による分類もない。GDM で学習してきた(つまり文法用語の説明ではなく、使い分けのルールに自分で気づく学習をしてきた)生徒の言葉を借りると、「is の時は sees / does not see に、am / are の時は see / do not see になる」が 3 単現の実質である。つまり、be 動詞の is / am / are の使い分けが定着していれば、新しいルールは必要ない。この点に関して、Here We Go! は 3 単現のまとめのページで、be 動詞の文を示して、その関連に気づかせるような扱いをしている。他の教科書のまとめでは、一般動詞の文しか示していないので、学習者は一般動詞の新しい文法規則として覚える(丸暗記する)ことになる。

is	lives	was	lived
am	live	were	
are			

## (2) 時に関する表現の使い分けの観点がない

どの教科書も現在形の次に時に関する表現として、過去形か現在進行形のどちらかを学習する。

- ・ 過去形 One World Blue Sky Here We Go!
- ・ 現在進行形 New Horizon New Crown Sun Shine

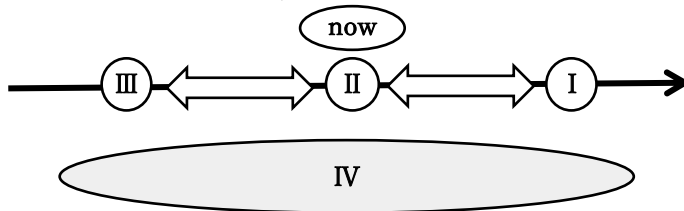
未来の文については

- ・ 1年で学習 New Crown One World
- ・ 2年1学期の始めに学習 New Horizon Sun Shine Blue Sky
- ・ 2年1学期の終わりに学習 Here We Go!

現在形の次に学習する「時に関する表現」の現在進行形、あるいは過去形がいつなのかも、それぞれ特徴がある。いちばん早いのが One World で 51 ページ / 125 ページ、つまり1年の学習の 40%が終わった時ということになる。つぎが New Crown で 83 ページ / 147 ページで 60%終了時点。いちばん遅いのが Here We Go! で 105 ページ / 133 ページで 80%終了時、つまり3学期の学習事項になっている。小学校 5, 6 年と中学校 1 年の 2 学期まで、2年と 9 か月のあいだ現在形の文ばかりを扱うことになる。

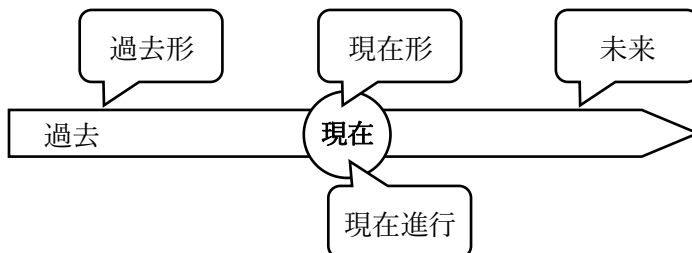
時に関する表現の基本的概念は、GDM で学習すると右のような図になる。take /

put / give で、(生徒のまとめの言葉を借りると) I …これからする、II …している最中、



Ⅲ・・・終わった、この3つの使い分けを理解し、次に see / have でⅣの現在形概念と see / sees、have / has の使い分けを学ぶ。

これに対して、検定教科書では、この3つの使い分けではなく、それぞれの現在形との使い分けを学習の大きなポイントとして指導する形となっている。検定教科書の構成から、この3つの導入をそれぞれ別個におこなわなければならないとしても、3つを習い終えた時点でその使い分けという観点での学習がないのが大きな問題である。時に関する表現のまとめを載せているのは New Crown (1年 pp.140-141) だけである。またこの3つの導入時期が短期間で学習するように配列されているのも、よいことと言える。ただ、現在形からスタート



して、現在形との比較で教えるため、そのまとめも右図のようなまとめとなっているのが残念である。日本語の「過去、現在、未来」といった言葉に引きずられたまとめで、実際の場面での効果的なまとめではない。

(3) be 動詞と一般動詞の導入が同時

小学校の英語科で教科としてきちんと定着していれば、復習として be 動詞と一般動詞をいっしょに扱うのも理解できるが、小学校で定着がされていない現状では、復習事項としての扱いは適切ではないと言わざるを得ない。逆にまず、is / am / are の意味や使い分けをきちんと導入、練習、定着を図ることが、言語材料が多くなった中学校の学習内容を理解させるのに必要と考えられる。この観点からも中学校1年のスタート時に GDM を活用することは、とても有効なことと言える。

### 3 GDM を活用するには

前章で述べたようなカリキュラムや文法観による検定教科書の「時に関する表現」の理解におけるマイナス面に対応するために GDM を活用することはとても効果的である。いちばんいい取り入れ方は、いろいろな条件が整っていればまず EP Book 1 の p.42 あたりまでを教え、それから検定教科書に入り、GDM で教えたことをうまく活用しながら教科書を進めていくことである。しかし、公立中学校でこのようなことはとても難しい。これまでの筆者の実践は Year Book No.58、64 で報告した。

どんなカリキュラムが現実的に可能かを考える前に、どんなねらいで GDM を取り入れるかを明確にしておく必要がある。まず一つ目に小学校2年間、そして中学校の始めでもぞんざいな扱いしかされていない is / am / are の基本的な意味と使い分けの理解が挙げられる。そしてこ

の理解をもとに、なかなか定着が難しい「3 単現」のルールに生徒が自分で気づき、使えるようにさせることが考えられる。次に「時に関する表現」の基本的な概念を身につけさせるための活用が有効である。以上のねらいを達成するために取り入れる GDM の内容として次の 3 つが必要である。

シリーズ① is / am / are

シリーズ② see / sees have / has

シリーズ③ take put give

これらをどのようなカリキュラムで取り入れることができるかの実践例とその成果を紹介する。

#### 4 実践例と成果

##### (1) 英語嫌いの増加に対して

愛知県の公立中学校(A 中学校)で 2021 年度に入学した学年での実践である。生徒数は約 150 人で、指導した教師は GDM をよく理解しており、また今までに GDM を活用して指導した経験が豊富な 2 人で、この 2 人で 1 年と 2 年を指導してきた。この学年は小学校 6 年の時に英語が教科化された学年で、そして中学 1 年では検定教科書が大きく改訂された 1 年目だった。

2021 年に入学した学年の実際のカリキュラムを次に示す。まず 1 学期は次のような内容だった。

1 学期	時	内 容
GDM (1)	6	① I You He She It They ② is am are here there ③ We You (pl.) ④ Review 確認テスト ⑤ This That my your his her ⑥ a
教 Unit 1	4	・ be 動詞 am are ・ 一般動詞 ・ 助動詞 can from about
中 間 テ ス ト		
教 Unit 2 - 1	2	・ be 動詞 is in to
GDM (2)	3	① This seat is here. That seat is there. ② in on the ③ These Those pens books

教 Unit 2-	2	・ 疑問詞 What Who for
GDM (3)	4	① see sees do not see does not see ② Do you / Does he ...? What do you / What does he ...? ③ review ④ have has do not have does not have
教 Unit 2-3	2	・ 疑問詞 How around by on
期 末 テ ス ト		
GDM (4)	3	① its open closed *検定教科書では shut は指導しない ② of ③ a leg the leg legs the legs of the seat ④ see sees の一般化
教 Unit 3	6	・ 疑問詞 Where When ・ want to 不定詞 ・ How many
GDM (5)	1	① before after

GDM (1) のねらいは、言うまでもなく存在の意味の is / am / are の理解と使い分け、そして代名詞の所有格、不定冠詞の理解である。New Horizon での his / her の初出は Unit 6、Unit 7 である。つまり、10 月まで隣の生徒の持ち物を英語で伝えることができないという不自然な状態が続くことになる。公立中学校で定期テストに教科書の範囲がないのは、保護者から意味のないクレームが来る可能性があるため、その対策として GDM (1)と(2)のあいだに教科書の授業を入れている。

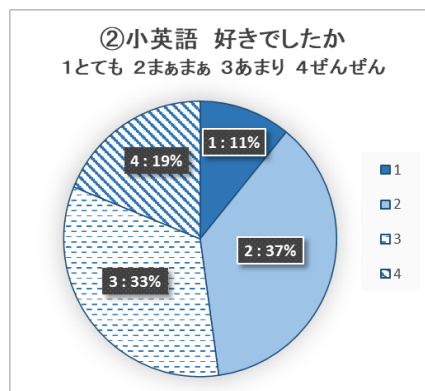
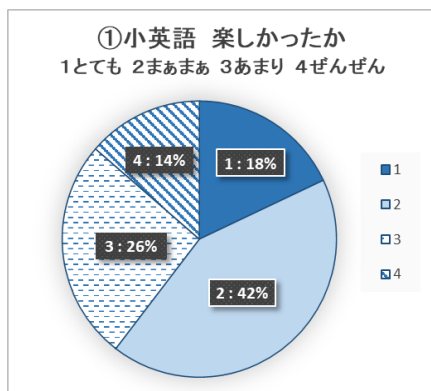
GDM (3)で see / sees を指導したら、それで3単現が定着するわけではない。生徒は see / sees と do not see / does not see の使い分けを学んだだけである。この使い分けのルールが like, play などの単語にも使えることを理解させることが必要である。その授業が GDM (4)の ④ see / sees の一般化の授業である。具体的な内容は、『GDM で英語の授業が変わる』pp.107-110 で詳しく紹介している。この一般化は必要な、そして重要なステップで、これをしなければ GDM (3)の 4 時間の効果はほとんどないといってもよい。しかし、この一般化の授業だけで十分かというそうではない。なぜなら教科書では Unit 6 まで 3 人称主語の文が出てこないで、likes, plays などを使う場面がないからである。そこで大切なことは see / sees の一般化の授業の後は、教科書を進めていく授業の中で 3 人称主語の文を使わなければいけない場면을教師が意図的に作ることである。このことに便利な活動が教科書にはいくつかあるので、それを使えば時間的にも効率よく練習することができる。たとえば New Horizon では、ペアワークで What animal / sport / subject do you like? や What time do you get up / go

to bed?などを聞きあう活動がいろいろある。教科書では聞きあって、それをメモするだけの活動だが、このあと自分のことと相手のことをクラスに伝える活動につなげたり、聞いたりする活動につなげると、単なるドリル活動とは異なる、文科省が言っている「目的・場面・状況」のあるコミュニケーション活動になる。New Crownでは、対話の内容を聞き取るリスニング問題を活用すると効果的である。リスニングの SCRIPT は、お互いに自分のことを言ったり、相手のことを聞いたりといった内容なので1, 2人称主語の文である。聞き取った内容を英語で伝えようとするれば、当然3人称主語の文が必要となり、とても自然な流れの中で3単現の文を使うことになる。このように検定教科書では3単現を指導する単元の前に、3単現を練習するのにとても便利な活動がいろいろ準備されている。これらを活用するのにGDMのsee/seesの授業はとても効果的なものと言える。

「文法用語は使わないのですか?」とよく聞かれることがある。『see/seesの使い分け』と『3単現』の意味は同じであるが、生徒にとって意味はまったく違うものである。『3単現』はまったく無機的な単なる記号に過ぎない。それに対して『see/seesの使い分け』という言葉は、生徒にとってはその授業の様子が思い出される。つまり『see/seesの使い分け』という言葉のむこうに、その授業でなかなか気づかなくて困ったこととか、友人の発言でハッと気づいた瞬間のこと、ワークシートの問題がよく解けていたなど、いろいろな思いが透けて見える言葉である。このようなことから、その授業の後すぐにその内容を文法用語でまとめることは、生徒にとっては効果的なこととは言えない。

この学年に小学校の英語の授業に対して、次のようなアンケートを1学期末に実施した。

- ① 小学校の英語の授業について、楽しかったですか?
- ② 小学校の英語は好きでしたか?
- ③ 中学校の英語の授業は楽しいですか?
- ④ 中学校の英語は好きですか?

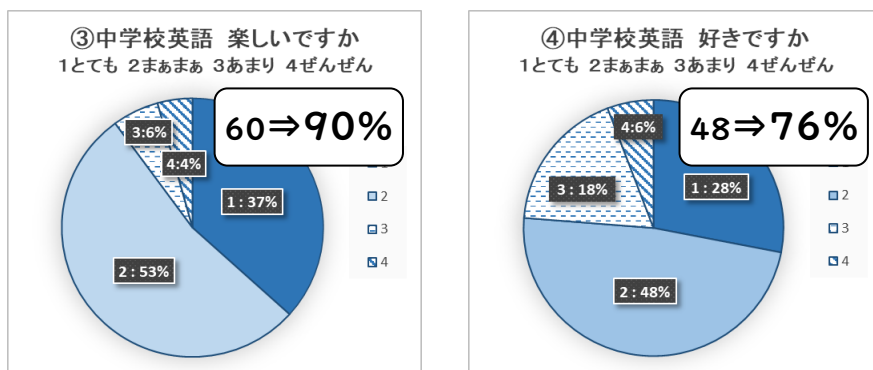


- 1:とても  
2:まあまあ  
3:あまり・・・  
でない  
4:まったく  
・・・ない

楽しかったのは60%、好きだったのは48%という結果で、半数以上は英語嫌いで入学してき



た学年で、その学年に前述のような授業を実施した後のアンケートでは、「英語の授業が楽しい」は60%から90%に、「好き」という生徒が48%から76%まで増加した。(Year Book No.75 参照)



どの検定教科書も1年の前半は小学校の復習の内容で、New Horizon では Unit1 から Unit5 まで小中接続という観点から、主な言語活動は小学校でおこなったものとはほぼ同じものである。英語嫌いになった生徒が中学校で心機一転がんばろうと思って入学して、英語の教科書を開いたら、嫌いになった活動が出てくる。そうすると、もういちど復習するから分かるはずだという暗黙のプレッシャーを感じるのがふつうで、これで英語嫌いが解消されるとは思えない。A 中学校の実践例のように、気づきを大切にしまったく別のスタイルの授業が英語嫌いの解消に効果的であったことは明白である。

(2) 「時に関する表現」の定着を目指した2学期の実践

2学期	時	内 容
GDM (6)	3	① thing person ② will take taking took ③ will put putting put
教 Unit4-1,2	4	・命令文 ・What time ...?
GDM (7)	2	① was were ② them
教 Unit 4-3	2	・What sport ...?
GDM (8)	1	① will give giving gave
中間テスト		

GDM (9)	4	① will go going went ② ③ will be ④ will come coming came
教 Unit 5	2	・動名詞 ・過去形 went, ate など (※Unit10 で再度基本文)
Unit 6	5	まとめ Let's Talk 1 3 人称単数現在形
Unit 7	3	・人称代名詞目的格 ・Which ・Whose
GDM (10)	1	① one the other ・ one another the other / the others
期 末 テ ス ト		
教科書	3	Let's Talk 2 Let's Listen 1 まとめ
GDM (11)	1	3 時制 一般化
教 Unit 8	6	現在進行形

GDM (6)～(9)は「時に関する表現」の基本的な概念の定着をねらいとしている。(6)～(8)は内容的に続けて指導したほうが効果的とも言えるが、前述のように半数以上が英語嫌いで入学してきて、それを1学期で大きく解消した学年ということを考えると、この take から give までの流れはハードルが高い内容なので、教科書を間に入れながら、そこで take / put / was, were / give の復習を十分にしながらゆっくりと定着を図るほうが良いと判断した。

GDM(9)までを指導してすぐに play, watch などに広げて I will play tennis with Ken tomorrow. といったようなことはすぐにしないほうが良い。また安易に文法用語でまとめることもしないほうが良い。教科書を進めていくなかで、授業のいろいろな場面で take / put / give / go / come のそれぞれ未来、現在進行形、過去形のどれを使うのかを復習していくことが大切である。教科書で現在進行形が出てくる単元の前に GDM (11) を行って、take / put / give / go / come の3つの言い方の使い分けのポイントをまとめ、それを他の一般動詞に広げる。このステップが、GDM の授業と教科書をつなげるものとしてとても重要である。(筆者の実践の具体的な内容は Year Book No.58, 64 で詳しく紹介している) 3 学期は GDM の5つの動詞だけでなく、他の既習の動詞を使って、現在形、未来、現在進行形、過去形の使い分けの定着が大きくなねらいとなる。

2 年になると、複文や不定詞、動名詞を学習するので、それまでに「時に関する表現」の定着を目指すことが重要である。2 年では教科書を進めていく中で、新出の文法事項である Key Sentence や前置詞、連語などの導入で GDM を活用していく。

「はじめに」で紹介した 2023 年の学力調査の次の問題の A 中学校の正答率は、55.7%で、プラス 15 ポイントであった。

A: Do you have any plans for summer vacation?

B: Yes. I ( visit ) my uncle in London. I can't wait!

A: Wow, that's nice! 全国の正答率・・・ I am going to / I will 40.4%

明らかに GDM を活用した成果である。この学力調査ではリスニング問題が 6 問あったが、すべて全国正答率よりも高く、平均でプラス 10.4 ポイント、そして一番高いのはプラス 23.5 ポイントだった。このように GDM を活用することはリスニングの力をつけるのにも大きな効果があることが分かる。

また、学力調査 17 問(話すの問題を除く)中、16 問が全国正答率よりもプラスという結果だった。この学年の国語と数学では、まったく逆の結果でプラスの問題が 2, 3 問だったことを考えると、GDM を取り入れた効果は明白であるが、それにもまして教科書とのマッチングをていねいに粘り強く指導してきた 2 人の教師の力量によるものであることは言うまでもない。あらためて 2 人の取り組みのすばらしさを確認しておきたい。2 人の取り組みのこのすばらしさは、ある問題の結果の数字に表れている。設問10で、「ウェブサイトに掲載する学校紹介を 25 語以上の英文で書きなさい」という問題が出された。この問題の無回答率、すなわちあきらめて取り組もうとしない生徒の割合が、愛知県では 22.6%だったのに対してこの学年では 19.8%と、3 ポイントもよい結果だった。小学校の時の英語嫌い、そして他教科の結果を考えると、この数字はとても大きな意味を持っていると言わざるを得ない。現在の学習指導要領、そして今の検定教科書に変わって現場の先生方の努力にもかかわらず 2 極化が以前より激しくなっていると、いろいろなところで言われている。このことへの対策は、やはり 1 年 1 学期がポイントであることは、A 中学校のこの実践と結果から明らかである。

## 5 おわりに

朝日新聞 2023 年 1 月 15 日の「折々のことば」で、谷川俊太郎さんの次のような言葉が紹介されていた。

『今の子どもたちに最も大事な「国語の力」は何かと問われ、「朝、家を出てから、学校に着くまでであったこと、見たことをきちんと言葉で伝えられればいい。詩を書くのはそのあとでいいでしょう」と応じたそうです。誰もが「自由な発想や想像力」といった答えを想像していた。』（下線は筆者）

国語教育についてのやりとりだが、入門期の英語教育についてもどうぜん同じである。しかし、今の中学校の英語教育、すなわち文科省が目指している方向は、この谷川さんの言葉とは反対の方向を向いている。入門期の英語教育に関わっている人々には、この言葉の持つ意味やその重要さをしっかりと認識し、授業作りに生かしていくことが今こそ強く望まれる。

## §1 序章

2020年のパンデミックは、Web会議ツールを大幅に進化させ、リモートワークを急速に普及させた。この流れは、遠隔地での仕事だけでなく、教育分野にもオンラインの新しい選択肢を増やした。しかし、2020年4月に出された最初の緊急事態宣言でオンライン授業に切り替えた教育機関や学習塾の大多数は、休校・休業命令が解除されると、パンデミックの制限や懸念が続く中で対面授業を再開し、オンライン授業を長期間続ける選択をしなかった。都内のICTに強い私立校でも、オンライン授業は台風や積雪による自宅待機時に行われる程度である。それでも、Web会議ツールはクラブ活動やサークル、一部の習い事で使われ続けており、小学生を含む若年層の間ではWeb会議ツールを使った経験が広がっている。

筆者がGDMで英語の授業をしているLINGUA LANGUAGE STUDIOでは、2020年4月中旬から6月下旬まで、すべての授業をオンラインで行った。7月以降は、一部のクラスでオンライン授業や対面授業のオンライン中継を始め、希望者が自宅から授業に参加し続けられる環境を作った。これらは新しい試みで、多くの挑戦があったが、想定を超える可能性を感じた。その結果、2021年からは、週2回の通学が必要だった中学生対象クラスを、週1回の対面授業と週1回のオンライン授業のハイブリッド方式に変えた(なお、現在はオンラインか対面かを生徒が選択できるようにしている)。本稿では、オンライン授業の可能性をさらに探るべく、4年間のオンライン授業で得た筆者の気づきと、それに先立つ受講者アンケートの結果を共有する。

## §2 授業の環境設備

オンラインでの双方向授業での環境設備として、私たちはZoomをWeb会議ツールとして採用している。これまでに他のツールを授業に使ったことはないため、他製品との比較はできないが、Zoomの画面共有、チャット、レコーディング機能は積極的に利用している。いたずら防止のため、画面共有の権限はホストである授業者のみに設定している。グループワークでブレイクアウトルームの使用も可能だが、多機能を駆使するほど、授業者の本来の業務以外の対応が増え、受講生の集中力を削ぐ原因にもなり得るため、実際の教室環境に近づける方針で進めている。

授業者が使用する機材には、パソコン、デジタルカメラ、スピーカーマイクがある。パソコンにはノート型と小型デスクトップ型(モニターが別途必要)の両方があり、どちらの場合も授業者の映像撮影にはデジタルカメラを使用している。その理由は、画質が良く、拡大縮小が容易で、アスペクト比をワイドスクリーンに設定できるからだ。デ

デジタルカメラとパソコンを接続するにはキャプチャーボードが必要だが、2024年現在では、スマートフォンをカメラとして使う方法も一般的になっている。スピーカーマイクには無指向性の卓上マイクを使用している。集音範囲が限定されているため、音質を良くするには話し手がマイクに近づく必要がある。このため、Bluetooth 接続が可能なマイクを選んでおり、教室内での移動が必要な場合には授業者が移動させている。

受講生には、パソコンまたはタブレットの使用を推奨しており、スマートフォンは画面が小さいため非推奨としている。授業者のカメラをスポットライト設定にすることで、受講生の端末画面には授業者の映像が大きく表示され、他の受講生の映像は画面上部に少数だけ小さく表示される。授業中は、カメラとマイクを常にONに保つよう受講生に求めている。対面授業と異なるラグを最小限に抑えるためである。これに関連する問題点については後述する。

### §3 授業時の心がけと工夫

このセクションでは、対面授業と異なる点で授業者が意識したことについて紹介する。

#### 1. 視覚に関して

パソコン画面を長時間見続けるのは疲れる。画面越しで授業者を追うのは、対面授業で目の前にいる授業者を追うのとは異なり、目への負担が大きい。したがって、オンライン授業の際には、対面授業よりも細かい動きを減らすように心がけた。画角の制限もあるため、事前に授業者の立ち位置をいくつか決め、授業時間中は不必要に動かないようにした。また、物を見せる時には手をどの高さに持ち上げるかも事前に決めておくことで、無駄な動きを減らせた。

カメラとモニターが同一箇所にないため、授業者と受講生の目を合わせるのは難しい。カメラ内蔵のノートパソコンを使用しても、通常カメラはモニターの上端に設置されているため、受講生からは僅かに上を見ているように見える。このため、目線が受講生と合わないことを前提に敢えて斜めに立ち、顔の上半分が画角に収まらないようにした。

絵や写真、映像教材を見せやすいのはオンライン授業の利点だ。Zoomの画面共有機能は、板書代わりには便利だが、写真を見ながらの発言時には使用しないことにした。画面共有中は授業者の顔が小さく表示されてしまうため、受講生の発言が消極的になる傾向があったからだ。写真の傍らから顔を出して覗き込むようにすると、受講生はより対話をしている感覚を得られた。

#### 2. 音声に関して

Zoomのノイズキャンセリング機能で聞こえなくなる音がある。例えば受講生が“What is in the bag?”と問う際、紙袋を揺すって音を出せば中身があることを示せるが、その音はオンラインでの受講生には聞こえない。また、物と物が衝突する音などもZoom越

しでは消えてしまう。もちろん「EP2 p.132 hammering」の再現はできない。物が衝突する音も Zoom 越しでは消えてしまう。このため、オンライン授業では聴覚情報に頼らず、先の例で “What is in the bag?” という際には、布袋で中身の形をなぞるなど視覚情報を主に使った。なお、音声データはノイズであってもそのまま再生されるので、noise を教える際は YouTube などを活用するとよい。

聞き取りにくい音には、s をはじめとする英語の摩擦音も含まれる。オンラインのみで長期間受講している中学生が、対面授業で同内容を受講している生徒に比べて、三単現の s や複数形の s を習熟していないケースがあった。授業者としては、摩擦音を大袈裟に発音するようにし、受講生の発声時には、あるべき音がマイクの特性で消えてしまうのか、それとも発音が不正確なのかを判断するために、度々言い直してもらうようにした。

### 3. He/She/They と We の導入

オンライン授業では、対面授業と比較して受講生間の関係が希薄になる傾向がある。§2 で述べたように、受講生の画面には他の受講生の映像が小さく表示されるだけだ。しかも、ごく少数の受講生の姿しか映らない。ギャラリービューという複数の画面を同じ大きさで表示する方法もあるが、それを使うと授業者の動きや使う道具が見えにくくなる。そのため、受講生にとっては、自分を指す I と授業者を指す You の関係が中心になり、He/She/They の導入時には教室内に授業者以外の男性と女性が少なくとも 1 人ずついる状況が必要だ。We に関しては、これまでの Grading を見直し、“We are in Japan.” の前置詞 in を学習する段階で導入した。

### §4 受講者アンケートの結果

オンライン授業を続ける中で、授業の進行や内容に関する自己の認識と受講生の実感の間にずれがないかを確認したいと考えた。授業を行う上で、授業者の感覚が独りよがりにならないよう、また、オンラインと対面授業を比較することで、それぞれの形式の利点や課題を理解するために、受講生の声を聞くことが不可欠である。本アンケートは以上の目的のもとで「大人のための話す基礎英語 5」オンライン中継授業受講者を対象に行い、受講生の率直な感想や体験を集めた。この講座は 2022 年に開講し、3 つある同一内容クラスのうち 1 つをオンライン中継で参加可能にした。本講座では、年間 30 回の授業で「EP3 pp.60-119」を扱った。アンケート対象者は、「EP1」から学び始めた社会人学習者で、通常オンライン中継のないクラスに通っており、このクラスを振替で受講したことのある人も含まれる。

Q1：オンライン中継授業は

対面授業より集中して受講できた	0名
対面授業と同じくらい集中して受講できた	4名
対面授業より集中できなかった	3名
対面授業と同じく集中できなかった	0名

Q2：講師の声は

対面授業より聞き取りやすかった	0名
対面授業と同じくらい聞き取れた	3名
対面授業より聞き取りにくいですが、受講に支障はなかった	3名
対面授業より聞き取りにくく、受講に支障があった	1名

Q3：他の受講者の声は

対面授業より聞き取りやすかった	0名
対面授業と同じくらい聞き取れた	2名
対面授業より聞き取りにくいですが、受講に支障はなかった	4名
対面授業より聞き取りにくく、受講に支障があった	1名

Q4：同様の授業形式では

今後も積極的に受講したい	3名
日によっては受講したい（悪天候時 体調不良時）	3名
できれば受講したくないが、対面授業がなければ受講する	1名
受講したくない	0名

以下は自由回答欄でのコメントである。オンライン授業に好意的な意見は前半に、否定的な意見は後半に記載した。

[A] オンラインだと他の受講生の顔色が気にならないので、その分集中できました。講師の声は、語尾が聞き取りにくい時がありましたが、何度か聞いていると理解できました。対面の受講生の声が聞こえにくいこともありましたが、オンラインの受講生の声はちゃんと聞こえていました。

60代女性

[B] 内容がとても充実しているので、集中しなければついていけません。講師の声が聞きにくいことは一度もありませんでした。対面授業に参加している人の声は、時々聞き取りにくいことがありました。他の受講生と話す機会がないので、少し話せる時間が

持てたらと思いました。交通に要する時間もなく、授業が始まるまでの時間を有効に使えて、とてもいいシステムだと思いました。たぶん対面の方が集中度が高いかもしれませんが、オンラインでもかなり集中できました。オンライン授業は、遠距離、出かけにくい人（高齢者）にとって、また、忙しい人にとっても良いシステムだと思います。コロナの時だけでなく、普段でもオンラインの授業があったらと思います。

70代女性

[C] GDMの良さは失われていなかったように思います。やりとりの間が多くなるのは残念ですが、仕方ないと思いました。講師の声は安心してよく聞き取れました。普段は対面授業のクラスを受講していましたが、オンラインで振替ができるのがとてもありがたいことが何度もありました。対面でもオンラインでも明瞭でわかりやすい授業でしたので、対面の方がより理解はしっかりできるような気もしますが、それよりもオンラインでも授業を受けられることの方がメリットが大きいような気がします。

50代女性

[D] いつ名前が呼ばれるかわからないので、緊張感をもって臨むことができた。他の受講者の声はマイクを通す方がクリアに聞こえた。マイクを通して他の受講生の声が重なることがあり、その場合は聞き取りにくかった。「講師が発話しているときは、生徒は黙る」というルールが必要。このルールを生徒に徹底させること。通学時間や交通手段を考慮しなくて良いのは助かった。前後に予定があり、出かけにくいときは便利だった。

50代女性

[E] マイクを通して他の受講生の声が入ってしまうと、講師の正しい発音、文が聞こえにくい時がある。正しい文を講師がきちんと話してくださり、それをオンライン受講者が黙って聞くことができれば問題はない。休憩時間や講師と雑談や質問ができないのは残念。これからの時代はオンライン授業が当たり前になるので、GDMでもリアルにこだわらず、教授法を検討していただきたい。

50代女性

[F] 発言のたびに微妙に間があいてテンポが遅くなります。声がこもっていたり、他の生徒さんの声が混ざったりして、自分の名前が呼ばれたかどうか聞き取れないことがあります。対面授業では、他の生徒さんが話している間も脳が動いていますが、オンラインだと遠く感じて、ついボーッとしてしまいます。コロナ等で対面授業ができない時に、オンラインの選択肢があったことは非常に良かったと思います。しかし、受講生に



としてはオンラインは気軽な分、緊張感や集中力を保つのが難しい面があるかと思えます。対面授業は「必要に迫られてコミュニケーションをとっている感覚」であるのに対して、オンラインは「面接を受けているような感覚」だと感じました。

60代女性

[G] 対面の方が楽しい。講師の声の聞こえ方は、もともとかなりゆっくり話されているので大丈夫だった。カメラの画角に制限があるためと思うが、板書の量が減少してしまうのが若干さびしかった。

50代男性

[H] イヤホンをつけて受講しているので、講師以外の生徒の声が全員同じ大きさに耳に入ってくる。講師の発話中に生徒がつられて発声したり、咳払いなどをすると、講師の声がかき消される。他の受講生の声が重ならなければ、講師の声は対面授業と同じくらい聞き取れるから、これは受講する生徒側の問題。講師が話している時は、口をつむぐ、またはマイクをオフにする。咳払いや独り言はマイクをオフにする。各自がこれを守れば、オンライン授業の問題点はかなり改善されるはず。授業に際して、講師が上記のルールを伝えたり、授業中にも注意を促すなどすれば、防げるのでは。とはいえ、オンライン授業の録画は、どうしても出席できなかったときの振替や、場合によっては授業の復習に役立つので、オンライン授業は継続してほしい。

50代男性

以上のアンケートから浮かび上がったのは、オンライン授業に対する受講生の直接的な感想や体験談であり、その中には肯定的なものも否定的なものも含まれている。これらの生の声を通して、オンライン授業の成果と課題が鮮明になった。次章では、これらのフィードバックと4年間のオンライン授業を通じて得た筆者の気づきを組み合わせ、オンライン授業の具体的な利点と直面している課題について深く探求していく。

## §5 オンライン授業の利点

受講生にとってのオンライン授業の最大のメリットは、アンケートのコメント[C][D][E]で共通して触れられている「時間的な融通が利きやすい」という点である。教室から離れた場所に住む受講生にとって、通学時間がないことは、継続的に受講する大きな理由となる。また、通学が不可能な地域からの受講も可能になり、GDMを全国に広めることができる。今後筆者が取り組みたいと考えているのは、遠隔地に住む講師同士が協力して教室運営をするプロジェクトである。複数の講師が同じカリキュラムで授業

を展開すれば、授業の振替が可能になる。これにより、講師の育成もしやすくなり、GDMの輪が広がる可能性がある。

画角の制限は欠点と思われがちだが、授業を実施してみた感想としては、その利点の方が大きかった。例えば、授業で使用する道具は大きいものが望ましいが、鉛筆や釘など、大きさに限界があるものもある。オンライン授業では、これらの小さな道具をカメラに近づけて大きく見せることができる。このカメラワークを活用する例としては、「in the street」のような前置詞 in の導入時に小型模型を使用して空間を可視化するなどが挙げられる。また、発音指導では、歯や舌の位置など口の動きを、授業者がカメラに近づくだけで示せる。飛沫の心配もない。

オンラインの授業は難しいと思われがちだが、適切な機材を揃え、ソフトウェアの操作に慣れていれば、GDM 授業を実施する際のハードルは対面授業よりも低いかもしれない。GDM 授業では、さまざまな道具を使ってシチュエーションを作り出すが、これらの道具を受講生に見せるタイミングを管理することが重要だ。オンライン授業では、受講生が見ることができるのは画面に映っている範囲内に限られるため、例えばカメラの下にその日の授業で使う道具を全て、見せる順番に沿って並べておくことが可能だ。さらに、「LIVE」の授業で通常は避けられるカンペの使用も、オンラインの死角に隠せば気づかれにくい。GDM 授業に慣れていない者がオンラインで GDM を始めるのは推奨しないが、「EP1」しか扱ったことがない講師が「EP2」の授業を初めて行う場合など、これらの工夫でハードルを下げることが可能だ。

## §6 オンライン授業の欠点

アンケートのコメントで複数の受講生が指摘していた通り、講師と受講生の声が機械を通じて同じ大きさで一方向から聞こえることは、オンライン授業の欠点としてまず挙げられる。GDM 授業は、変化に富んだ状況に応じてさまざまな英語表現を生み出す「LIVE」の授業である。オンライン授業では、コンピュータを介してインターネット上でのやり取りが行われるため、目の前の人との会話に比べてわずかながらタイムラグが生じる。

§2 で述べたように、受講生にマイクを常に ON にしてもらうのは、スイッチの切り替えによるタイムラグを減らし、できるだけ対面授業に近い環境を実現するためだ。また、GDM 授業では、生徒が同時に話すのが普通であり、立場に応じて異なる発言ができる状況が理想的だ。指名された時のみ話すスタイルの授業とは異なり、既習事項は講師の助けを借りずに、新出事項は講師の指導を受けながら、多くの時間を使って口を動かすのが GDM の特徴だ。しかし、これらの GDM の優位性をオンライン上でも実現するのは難しい。なぜなら、Web 会議ツールはどの製品も、同時に何人かが声を揃えずに発話することを前提としたシステムではないからだ。オンライン授業で同時に発言すると、受講生

の端末では全員の声の一つの音声データになってしまい、目的の声だけをピックアップすることはできない。このため、誰かが話している時（講師や指名された生徒）は、他の受講生は静かにする必要があり、結果として一人ずつ順番に話すスタイルが多くなる。また、生活音などの不要な音が授業を妨げる。他の受講生の耳には、不要な音も個々の発話と同じ大きさで入る一方で、その音の発生源である本人のスピーカーからは音が出ないため、不都合が起きていることに気づかない。対面授業では、新しい英語表現を覚えようと授業者の発話に合わせて口を動かして練習をしている受講生もいる。しかし、その声も Web 会議ツールでは自動的に増幅され、講師の発話を覆ってしまう。発話時のみマイクを ON にするルールに変更すれば、不要な音や講師の声が聞こえない問題は解決するかもしれない。しかし、その場合でも GDM の「LIVE」らしさを保てるかどうかは不明だ。コメント[C][F]で指摘されていたように、オンライン特有のタイムラグはすでに授業テンポを遅くさせている。このラグがさらに大きくなれば、授業進度を維持できなくなるかもしれないし、受講生の集中が途切れがちになるかもしれない。これらの点も課題として考慮する必要がある。

授業者として最も気になるのは、受講環境がこちらの想定通りかどうかの不確かさである。受講生の受講環境の把握が難しい。そして、受講環境の構築のために、対面授業では不必要なやり取りが必要となる場合がある。授業中は All English で進めたいが、オンライン授業のルールについては正確に伝えるため母語の使用が生じる。例えば “That is a man. That is a woman.” と受講生が言う際に、That が何を指しているのかを手指で指し示さなければ、受講生の発言が正しいかの判断が難しくなる（授業者が指し示すと、受講生の能動的な発言ではなくなる）。対面授業では、受講生の手を取って教えることができるが、Zoom 越しでは「手を使って」というジェスチャーをしても、そのジェスチャーが理解できない受講生は多い。解決策としては、英語での意思疎通が困難な時期に必要なルールについては、事前にオリエンテーションで伝えておくことなどが考えられるが、それでも期待通りに受講生が動いてくれるとは限らず、対面授業よりも妥協が多くなるのが現状である。

## §7 結論と展望

本稿では、オンライン授業の実施に際して得られた受講生のフィードバック、授業者の心がけと工夫、そしてオンライン授業の利点と欠点について考察してきた。GDM を用いた英語授業においては、その特徴ゆえに対面授業にはない独自の課題が浮き彫りになったが、それと同時にオンラインならではのシチュエーションが新たな学習機会を生み出していることも明らかになった。

画面越しになることで生じたオンライン特有のシチュエーションは、受講生に新しい

視点をもたらし、コロナ禍以前のオンライン授業の概念では想像できなかったインタラクティブな学習の可能性を開いた。例えば、カメラワークを駆使することで小さな道具を大きく見せたり、空間の関係性を可視化しやすくしたりするなど、オンライン授業ならではの工夫が教育の質を高めることに貢献している。

しかし、オンライン授業の欠点も明らかになった。講師と受講生の声が同じ大きさで一方向からしか聞こえないこと、タイムラグによる授業テンポの低下、受講環境の不確かさなど、これらの課題はオンライン授業特有のものであり、対面授業に近づけようとする努力だけでは解決が難しい。

このような状況を踏まえると、対面授業に近づけるのではなく、オンライン授業向けの指導案を練り直すことが、その良さを最大限に引き出す鍵となる。オンライン授業固有の利点を生かしたカリキュラムの開発、受講生の参加を促すための工夫、技術的な課題の克服に向けた取り組みなど、さまざまな角度からのアプローチが必要である。

結局のところ、オンライン授業は対面授業の代替ではなく、それ自体が独立した価値を持つ教育手法である。今後は、オンライン授業の可能性をさらに広げ、受講生にとって有意義な学習体験を提供できるよう、教育の質を向上させるための新たな指導案を模索し続ける必要がある。これには、授業者と受講生の双方が、オンライン授業ならではの形式に適応し、互いに協力していく姿勢が求められる。

## 聖書言語の意味解釈

～ BBE (*The Bible in Basic English*)版を範として (1) ～

後藤 寛

### まえがき

本稿は semantics (記号論・意味論) 研究の一環として聖書 (特に旧約) に照らした神話と古代の史実の一端を解釈するものである。神話か真話か? で象徴的聖書言語の hermeneutics (釈義・解釈論) は一筋縄ではいかないが、それでも神話にも普遍的な pattern (パターン) があるとし structuralism (構造主義) 思想家の Claude Lévi-Strauss(1908-2009) (C.レヴィ＝ストロース) は mytheme (神話素) を言語学的な phoneme (音素) 分析からのヒントで見いだした。

本稿では phoneme よりさらに上位の glossematics [glos (= tongue : 舌) + ematics (< emics : 素論)] (言語素論・言理学) の視座から、ユダヤ教典旧約聖書原本での Hebrew (ヘブライ語) [一部は Aramaic (アラム語)] と今日なお未解明の Japanese (日本語) のルーツとの関わりも含め、一般には注目されない Judaism (ユダヤ教) と日本の Shintoism (神道) の儀式・祀り事の類似性に焦点をあてた biblical interpretation of the symbolic language system (象徴的聖書言語の釈義) を試みる。背景で onomastics (固有名詞学) とも関わる。

God's Word (神の言) としての聖書言語であるが、象徴的で謎めいていてその意味解釈が誰にとっても容易でない箇所も多い。いわゆる真・善・美のうち何が真(true)で、何が善(good)で、何が美(beautiful)なるものを求めてのこととなるが、「真」も Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* では True<sup>S</sup> と True<sup>E</sup> (S : Symbolic / E : Emotive) の 2 区分が示されもする [p.151, 10th edition (1952)]。

簡素で素朴な意味を提供するという点ではその極めつけである Basic 言語を介し、意味をできうる限り透明化しての解釈には特別な意義がある。ここでは種々の英語訳聖書のうち  $850 + 150^+ = 1,000^+$  ( $1,000 + \alpha$  語) の語彙内で書かれる Basic English 訳聖書 BBE (*The Bible in Basic English*) [手元にあるハードカバーで 1949 年版 (初版)] を範とし、その内容の symbolism (象徴性) を見てみる。

### 0. BBE : *The Bible in Basic English* とは

Basic 聖書 BBE では 150 語の Basic プラス  $\alpha$  韻文・聖書用語 (各々、100 語と 50 語) 以外に実は便宜的に用いられる語も定められている。したがって BBE は上記 1,000<sup>+</sup> words で書かれているということになる。後藤(2016)で Basic の体系にはプラス  $\alpha$  語が、

その見方はやや複雑ではあるが全部で 654 語ある計算となることを示した。このうち BBE 版では感情移入を付加する上記 150 語は特別に意味あるものとなる。プラスα語なしには全 910 頁の BBE は 1 頁たりとも成立せず、Basic としては読めない理屈となる。

語彙制限の下で BBE は上記、旧約でのヘブライ語（一部アラム語）と新約でのギリシヤ語原本とともに、英語訳としては 17 世紀初頭(1611 年)発刊の *Authorized Version* (欽定訳聖書) を範とし、英国・ケンブリッジの The Orthological Institute により相当な精密度で翻訳されたものである旨が「まえがき」に記されている。

この BBE 聖書は原典から高次の metalanguage (メタ言語) としての Basic 言語に厳密に訳出されたもので、word-for-word (逐語本位) 的か thought-for-thought (意味本位的) かを含め simplicity をもつ style (文体) とは実は単純には言えない。usage (語法) 上も現代英語での慣用性の基準からすれば聖書特有の古風な風味と荘重さを合わせもっている。他の版で BBE より simplicity をもつものはある。それでもこの BBE は Basic 言語の究極的な全体系を提示するものであり、その全景(panorama)を見渡すものである。 これへの注目なしには orthology (Basic 言語学) への展望も得られない。

## 1. Comparative theology (比較神話学) 的に垣間見る Japanese-Jewish common ancestry theory (日本・ユダヤ同祖論)



紀元前 10 世紀には古代イスラエルには十二部族がいたが第 3 代 King Solomon (ソロモン王) の死後、南北に分裂した(922 B.C.)。その後、紀元前 8 世紀に北 (北イスラエル王国) の十部族が Assyria (アッシリア) に滅ぼされ離散の民となり、Canaan, the Land of Promise (約束の地カナン) の Palestine (パレスチナ) を後にし世界各地を放浪する (the~)Diaspora (離散の民) となった [今日もその行方は歴史上の謎となっている]。

また紀元前 6 世紀(586 B.C.)には南 (南イスラエル王国) の二部族が Babylonia (バビロニア) に滅ぼされ支配階級の者たちが捕囚の身となった。これが Babylonian Captivity (バビロン捕囚) である [旧約 Jeremiah 『エレミア書』 52 章 24-34 節]。後に彼らは帰還が許され故郷に定住することとなり古代イスラエルは始祖 Abraham (アブラハム) の孫 Jacob (ヤコブ) の 12 子のうちの第 4 子であった Judah (ユダ) が族長になり、その地は Judea (ユダヤ) となり首都は Jerusalem (エルサレム) となった [Jeremiah 52 章 31-34 節]。

Old Testament (ユダヤ教典旧約聖書) はこれを史実として記すが、このあたりから cross-cultural context (通文化的脈絡) で comparative mythology (比較神話学)、folklore (民俗学的伝承)、cultural anthropology (文化人類学) 等々の見地からの追究がなされ、今日知る人ぞ知る Japanese-Jewish common ancestry theory 「日本・ユダヤ同祖論」が浮上した。日本で 1980 年代から 90 年代初頭にかけてこの謎めいた理論に関する多くの書

が一举に世に出た。

歴史的に上記、古代イスラエル民族が離散の民として世界各地へ集団で散り、その一部は日本へも渡来したと考えられるのは確かであろう。そして彼らの精神的支えとしての Judaism (ユダヤ教) での神 Yahweh が Shintoism (日本神道) の神とも融合し、**民族的に日本人には神の選民ユダヤ人の血が流れている**という説が生まれた。これがいわゆる **日本・ユダヤ同祖論**〔略し日・ユ同祖論〕である。

さらにこれは日本の天皇家の祖とも関わりとされ、謎めいた諸説が展開されることともなった。神話上での神・天照大神を祀った約 2,000 年の歴史をもつ三重県伊勢神宮参道の石灯籠にはユダヤの第 2 代 King David (ダビデ王) の紋章で今日イスラエル国旗にもなっている六芒星  と天皇家の十六弁菊花紋  が刻まれ、立ち並んでいる。数は約 700 基とされるが独特な光景である。戦後に GHQ のマッカーサー元帥の命令で設置されたと言われもするが、何の象徴か？やはりマッカーサーは旧約聖書を聖典とするユダヤ教と太古から天皇を神とし崇めてきた日本神道の類似性を鑑み、2つの紋章を伊勢神宮に残すことを命じたのか？

天皇家の菊の家紋は今日、エルサレムの旧市街を囲む城壁西門のいわゆる Wailing Wall「嘆きの壁」にも残されているのもどうやら事実らしい。ユダヤ族と日本の天皇家の不思議な結びつきということになるが、『古事記』『日本書記』の記述をも含めたスケールの大きい問題へと発展する。

旧約聖書 Genesis『創世記』に記される大洪水と Noah's ark (ノアの箱舟) はよく知られるが、この箱舟は後に神霊の宿る箱となった。Exodus『出エジプト記』に記されるが、紀元前 13 世紀頃に奴隷の身であったユダヤ民族がエジプトから逃れ Red Sea (紅海) を渡るとき Moses (モーゼ) が用いた指揮棒 (杖) は神の御手となった。さらに後に彼が神から授かった Ten Commandments / Decalogue (十戒) の刻まれた石板の入った箱が神との Ark of the Covenant (契約の箱) となったが、これが日本の祀り・祭りに見られる神輿 (みこし)・山車 (だし) と化したと解釈できるか？なお、漢字の「祭壇」の「祭」「壇」はまさに神輿の形である。

日本の天皇家に代々伝わるいわゆる the Three Sacred Treasures (三種の神器) の勾玉は、その形からもイスラエルの民がエジプトから脱出し荒野を放浪するときの食料 manna (マナ) の器か？それとも上記ノアの箱舟か？剣はモーゼや兄で祭司の Aaron (アロン) がやはりこのエジプト脱出で用いたときの奇跡の起こる指揮棒？旧約では十戒が石版に文字で刻まれたものであったが、後の新約でこの文字が心の中にまで深く刻まれるものとしてそれを映し出し見せる鏡となったのか？〔三種の神器、勾玉、剣、鏡をそれぞれ Basic では the Three Things of Great Value ; pot / vessel / jewel box ; fighting-blade ; looking-glass などとなる〕。

なお、「モーゼ」という名はヘブライ語では「引っ張り出す」の意味とされている。彼は生後間もない頃にナイル川の岸辺で籠に入れられ浮かんでいたところを拾われ、救われたと旧約 Exodus 2 章 1-10 節は記すがこれは日本の伝承話『桃太郎』と類似する。冒頭「まえがき」で触れた mytheme (神話素) をここにも垣間見る気がする。桃太郎にまつわる神社は岡山県にあることが知られている。

日本の神社祀り (祭り) などで担がれる神輿 (山車) はやはりノアの箱舟を想起させる。京都の八坂神社を中心に執り行われる祭りに祇園祭がある。元来が「祇園 (ギオン)」という名はユダヤ人にとっての聖なる地「Zion (シオン)」の丘に似た音の響きがあるが、「ギオン」はユダヤの Zionism (シオニズム) 運動とも結びつくか？ 祇園祭の神輿に飾られる織物 (タペストリー) の絵柄は Abraham の息子 Issac (イサク) の結婚式の模様を示すものと言われている。また、夏祭りの盆踊りで屋台の周りで聞かれる「エンヤラー」などの唄・掛け声・はやし詞 (ことば) の意味は？ これはユダヤの神 [Yahweh (ヤーウェイ) / Jehovah (エホバ)] を賛美するものと語積できるか？ あの屋台もやはり一種のノアの箱舟を模したの？ 英語で神を賛美する Hallelujah! 「ハレルヤ！」にも Yahweh の響きがある。

今日、三重県尾鷲市には「ヤーヤ祭」がある。また神輿など担ぐときに「セーノ」という掛け声もあるが、どういう意味か？ 「一斉の」の略か、それとも伊勢神宮の「伊勢 (イセ)」の転訛？ 「イスラエル」の国名も「イセ」と似ている。伊勢神宮の「イセ」は、ダビデ王の父 Jesse (ジェシー) の名が新約での Jesus (イエス) とも同系であることからやはりすべて関連があるのか？ 日本の神社の儀式とユダヤ教での儀式が酷似していることは事実で、旧約聖書の記述と照らし合わせれば次節で触れる日本の国技である大相撲での儀式・神事も納得できてくる。

そもそも神社の「社」は「ヤシロ」か Yahweh の「ヤーシロ」か？ 神社にある「社務所」が「所務社」と右→左への書き方もされるが、ヘブライ文字も書き方は右→左へとなる。Hebrew (ヘブライ語) 風の「シャマシュツ」は「神と関わる奉仕」のような意味らしい。この神社の「社務所 (シャムシヨ)」は見事な名称書きか。なお、英語で Shamash は南西アジアの神話での太陽神の名とされている。

十二部族のうち二部族は残ったが、世界各地に離散し失われた ten lost tribes of ancient Israel (古代イスラエルの十部族) はどこへ行ったのか？ である。南太平洋に浮かぶ Solomon Islands (ソロモン群島) はダビデの子で繁栄をもたらせたイスラエル第3代王 King Solomon とやはり関わりがあるゆかりの地となっている。

上で祇園の例を挙げたが、日本にも渡来しただろうユダヤ民族の居住地に関しては諸説がある。地名・人名の秦は秦氏からで、映画村で知られる京都太秦はユダヤ人の居住地であったとされるが太秦「ウズマサ」は日本語風のものには思えない。やはりユダヤ



系渡来人にルーツがあるか？また、たとえば「矢部」はヘブライ語風のカタカナでは「ヤーウェイ」か？岩手県の「イワテ」はヘブライ語風には「ユウダ」（ユダヤ）の転訛したものとも言われる。東北地方の日本語母音「イ」と「エ」は共に英語母音の[i]に近い音とされるが、これは半母音[j]とも近い。一方で Ainu（アイヌ語）との関わりも考えられるにせよ、こういう例を挙げれば際限がない。ここで提示する例はそのうちのごくわずかなものである。

今日、モーゼを儀式として祀る墓が石川県能登にあるらしいし、キリストを儀式として祀る墓が青森県八戸市にあるのも事実のようである。いずれにせよ、太古に広く日本にも渡来・移住したユダヤ人の末裔が、混血で今日の日本人となっていることはどうやら否定できない確かな事実と言えそうである。

New Testament（新約聖書）に事実には到底思えないイエスによる数々の奇跡の記述があるが、たとえば Sea of Galilee（ガリラヤ湖）での出来事であったというイエスの水上歩行もその奇跡の業の1つとされる。これは長野県の諏訪湖で冬季に氷の張った水上を歩く御神渡り（おみわたり）の神事とも奇妙に重なり、聖書記述と日本神道での神話におけるパターン例の1つ（mytheme：神話素）をここでも垣間見る気がする。諏訪には有名な諏訪大社もある。商法(business)ではユダヤ商法と日本商法(Jewish-Japanese way of doing business)にはやはり類似点があるか？等々、何かとユダヤと日本の関わりは注目に値することは確かである。

## 2. 聖書記述から検証する Judaism（ユダヤ教）と Shintoism（日本神道）との接点

前節で comparative theology(比較神話学)的見地から知る人ぞ知る theory of Japanese-Jewish common ancestry（日本・ユダヤ同祖論）に関わる若干の具体例を引き合いに出してみた。本節ではこのあたりからやはり BBE (*The Bible in Basic English*) 版(1949)を範に、Old Testament（旧約）の記述から Judaism（ユダヤ教）と Shintoism（日本神道）との接点を確認してみることとする。

まずは旧約 Genesis『創世記』に記される大洪水とノアの箱舟に関わる箇所を抜粋で見してみる〔破線による省略・下線・イタリック体表記は筆者。イタリック体の語はいずれも **BBE で頻出する韻文・聖書用語**としての **プラス  $\alpha$  Basic 語**。以下同様。なお、Basic における全プラス  $\alpha$  語は後藤(2016, pp. 233-240)参照〕。

- 1) And *God* kept Noah in mind, and all the living things and the *cattle* which were with him in the *ark* : and *God* sent a wind over the earth, and the waters went down.... and the rain from *heaven* was stopped.... And on the seventeenth day of the seventh month the *ark* came to rest on the mountains of Ararat. (Genesis 8 : 1, 2, 4)

これは神から与えられた楽園に次第に人間の傲慢さ・悪がはびこってきたことに対する天罰として大洪水が起こったという下りにつづく記述である。

神は敬虔な Noah (ノア) のことは忘れなかった。彼と親族の人間 (全部で 8 名であった)、全動物 (つがい)、家財がこのノアの造った箱舟に入った。やがて神は地に風 (神風) を吹かせると水が引いていった。天から 40 日 40 夜 (forty days and forty nights) 降りつづいた雨も止んだ〔聖書で用いられる数の「4」は大地の広くあまねく東西南北 (north, south, east and west) ・四方八方の意味とも解される〕。

文末下線では第 7 番目の月の 17 日目 (7 月 17 日) に箱舟は Mt. Ararat (アララト山) に漂着したと記される。文中の 7 月 17 日という日付けに注目したい。今日、この日は前節で触れた神輿 (山車) が担がれる 毎年恒例の京都祇園祭りの儀式の日とピタリと一致する。八坂神社を中心に繰り広げられる祇園祭りは旧約に記されるノアの箱舟がアララト山に無事漂着したことをこの日に飲み祝う儀式として伝承されたものなのか? なお、ヘブライ語名 Noah は「安らぎ」の意味とされる。

日本の祀り (祭り) で神輿 (山車) の上に載せられる山の形に造られた山鉾 (やまぼこ) はノアの箱舟が漂着した山のトルコ東部の Mt. Ararat の象徴?あるいは、後で 5) として扱うが、出エジプト後にユダヤの民がたどり着いた神の山とされるシナイ半島の Mt. Sinai (シナイ山)?それともやはり前節で触れた「祇園 (ギオン)」とも音の響きが似ているエルサレムの Mt. Zion (「シオン」の丘) を象徴するもの?ユダヤ教と日本神道の類似性の一端がここでも見え隠れする。

前節で日本の国技・大相撲の儀式もユダヤ教の儀式と酷似している旨を言ったが、これに関連しさらに旧約『創世記』の記述を次に見てみる。

2) Then he said, what is your name? And he said, Jacob. And he said, Your name is no longer be Jacob, but Israel : for in your fight with God and with men you have overcome. (Genesis 32 : 27-28)

この節はユダヤ民族の始祖 Abraham (アブラハム) の孫の Jacob (ヤコブ) が夜に目を覚ますと天使 (angel) が現れ、この天使と夜明けまで格闘技の相撲をしたという下りにつづく箇所である。

天使は彼 Jacob を負かせないと知り“汝の名は何というのか”と言うので“Jacob だ”と答えた。天使は“汝は神と人間との格闘相撲で勝ったので汝の名はもう Jacob (ヤコブ) ではなく、Israel (イスラエル) だ”と言った〔文中下線部〕。ヤコブと天使の格闘相撲を神が天から見下ろしていたという解釈になる。

ヘブライ語の人名には日本語の人名のように意味がある。Abraham は「全人の父」、Jacob は「かかとをつかむ者」の意味とされている。Jacob は天使との一晩中の相撲で勝ち Israel という名になり祝福されたわけで、Israel はヘブライ語では「勝者、神の支配」

の意味とされる。

今日、日本の大相撲では年末の東京場所千秋楽には天皇が国技館を訪れ客席上方から相撲観戦をする習わしがあり、これは「天覧相撲」と称される。まさにこれは神が天から相撲を見下ろす儀式ということになる。やはり上記、旧約聖書に基づくユダヤ教伝承の一例と解釈できることになる。また、春場所後には伊勢神宮での恒例の神とも見なされる横綱の奉納土俵入りもある〔ここではイタリック体の *dawn, blessing, God* が Basic での韻文用語でプラス  $\alpha$  語として用いられている。ついでながら、天使の *angel* も Basic での韻文用語である〕。

さらに、日本の神社の朱色に塗られた鳥居の門は何を意味するか？である。漢字の「門」はまさに門の形であるが、ヘブライ語で鳥居の「トリイ」は「門」を意味する語の音に近いとされてもいる。鳥居に関し旧約聖書にその意味を求めればユダヤ教でのよく知られる「Passover (過ぎ越しの祀り)」がやはり想起される。

過ぎ越しの祀りは奴隷の身のイスラエル人のエジプト脱出を祝うものである。新年 1 月の脱出前に神がエジプトに災いをもたらすため、あらかじめイスラエル人の家だけがその害が及ばないように神が通り過ぎ(*passover*)できるよう目印としてイスラエル人には羊を夜食とさせ、その肉の血を彼らの家の戸口の柱に塗らせた〔戸口には青木の枝 (*hyssop*) を取り付けておくようにもさせたが、これは日本の正月の門松・松飾りとなっている？今日、青木の枝は神社儀式でも用いられる〕。このあたりを Exodus 『出エジプト記』の記述から次で確認してみる。

3) And the *Lord* said to Moses and Aaron in the land of Egypt. Let this month be to you the first of months, the first month of the year... And take your meal dressed as if for a journey, with your shoes on your feet and your sticks in your hands : ... It is the *Lord's Passover*... For on that night I will go through the land of Egypt, sending death on every first male *child*, of man and of *beast*, and judging all the *gods* of Egypt : I am the *Lord*.

And the blood will be a sign on the houses where you are : when I see the blood I will go over you, and no *evil* will come on you for your destruction, when my hand is on the land of Egypt... (Exodus 12 : 1, 2, 11-13)

これがユダヤ教での「過ぎ越しの祭祀(*Passover*)」の由来となっている記述の一端で、ここでは過ぎ越しの日の食物が旅用に特別に調理されたものとするよう示されている点は興味深い〔ここでの語 *Passover* は Basic の範疇に入る。また、文中にある *dress* は Basic 本体の 850 語中の 1 語であるが、*dress, dressing* は原義が「準備すること・整えること」で衣服ばかりでなく料理にも、さらには他の日常的な事柄で何かを「仕上げる」のような意味でも用いられ、まさに衣食住に関わることを意味的に包含する語と言える〕。

この記述の後でイスラエル人は新年 1 月の 7 日間は無発酵のパン(unleavened cakes)を食べるべきことが記されるが、これぞまさに日本での正月の餅となっている？それを次に 3)'として提示する。

3)' For seven days let your food be *unleavened* cakes ; and on the seventh day there is to be a *feast* to the *Lord*. *Unleavened* cakes are to be your food through all the seven days ; .... (Exodus 13 : 6-7)

この聖書記述はまさに新年の正月 7 日間に餅を食べる日本の風習と一致もし、ユダヤと日本の接点を感じさせる [ここでは *unleavened* {un + leavened + ed}が Basic でのプラス α 聖書用語の 1 語である点は注目されておいてよい]。

さらに次をユダヤ教典旧約 Exodus から引用する。

4) And when Moses' hand was stretched out over the sea, the *Lord* with a strong wind made the sea go back all night, and the waters were parted in two and the sea became dry land. And the *children* of Israel went through the sea on dry land : .... (Exodus 14 : 21-22) ....

この節は上の 1)での大洪水の中で神風(divine wind)が吹き、水が引き、地が現れ Noah 一族らが救われたという記述と重なりもし、同テーマと解釈もできよう。奇跡は自然界をも支配する全能の神(Almighty God)の業として聖書では描かれる。

イスラエルの民は奴隷として住んでいた Egypt (エジプト) から脱出を試みたが Red Sea (紅海) で行先を失った。後方には Pharaoh (エジプト王)の軍が追跡していた。そこで指揮者 Moses (モーゼ)が海岸で海に向かって手(杖)を振りかざすと猛烈な神風が一晩中吹き、次第に海が 2 つに割れ、乾いた海底が見えてきた。そしてイスラエルの民は無事そこを通り抜けたというのである。神の命(めい)を受けたモーゼの指揮でのエジプト脱出の成功とその祝福である。

次はこの後に彼らがたどり着いた場所の Mt. Sinai と、そこで神から授かる御言葉に関する下りでの記述である。

5) In the third month after the *children* of Israel went out of Egypt, on the same day, they came into the waste land of Sinai .... And Moses went up to *God*, and the voice the *Lord* came to him from the mountain, saying, Say to the family of Jacob, give word to the *children* of Israel : .... I am the *Lord* your *God* who took you out of the land of Egypt, out of the prison-house. (Exodus 19 : 1, 3, 20 : 2)

すなわち、イスラエルの民がエジプトを脱出した後、モーゼの指揮で荒野を放浪し、道中では幕屋(テント)を張り [幕屋も彼らにとっては伝承の箱舟の形をしていて荒野での礼拝所でもあり、これは後に日本の祀りでの神輿となったものの象徴でもあるか?]。たどり着いたところがシナイ半島の Mt. Sinai (シナイ山)であった [なお、*tent* (幕屋)

は Basic でのプラス  $\alpha$  語で聖書用語の 1 語である]。

モーゼが神の下へ行くと山から主の声が聞こえた。“Jacob(ヤコブ)の家系 Israel (イスラエル) の民に言え、我(われ)が汝たちをエジプトの地と牢獄から救い出した主なる神(the Lord your God)だと言え”という記述である。そしてここで神が彼らに守るべきとして示したものが 10 カ条の戒律 (十戒) であった。次にこの十戒の中身を列挙してみる〔番号付けは筆者〕。

- 6) ① You are to have no other *gods* but me. ② You are not to make an *image* or picture of anything in *heaven* or on the earth or in the waters under the earth. ③ You are not to make use of the name of the *Lord your God* for an *evil* purpose. ④ Keep in memory the *Sabbath* and let it be a *holy* day. ⑤ Give *honour* to your father and to your mother. ⑥ Do not put anyone to death without cause. ⑦ Do not be false to the married relation. ⑧ Do not take the property of another. ⑨ Do not give false *witness* against your *neighbour*. ⑩ Let not your desire be turned to your *neighbour's* house, or his *wife* or his man-servant or his woman-servant or his *ox* or his *ass* or anything which is his. (Exodus 20 : 3-4, 7-8, 12-17)

これらのうち①～④は人間の神に対する掟、⑤～⑩は人間の人間に対する掟ということになる。シナイ山でモーゼが神から授かった Ten Commandments / Decalogue)〔十戒〕であるが、これがやはり日本神話での三種の神器の「鏡」か？

ここで④の「Sabbath (安息日)を聖なるものとせよ」という戒律文言について一言付け加えておく。これは週の6日間は働き7日目は休息せよという意味であるが、その根拠は一般に知られているように創世記第1章の記述に由来する。

すなわち、神による天地創造が6日間で完了し、それに満足した神が7日目には休息したと記される。[cf. And *God* saw everything which he had made and it was very good. And there was *evening* and there was morning, the sixth day... And on the seventh day he took his rest from all the work which he had done.] (Genesis 1 : 31, 2 : 2)

聖書言語では天地創造での数の「7」は完成・完全さを象徴する。全体(whole)を表す「1」も完全ナンバーとなろうが、「7」に「1」の欠如する「6」はやはり不完全さの象徴か？新約 Revelation『黙示録』に6が3つ並ぶ数「666」が善に対する「悪」の象徴ともなる〔13章18節〕が、この意味解釈は謎めいている。また、世界の終末に関するパレスチナ北部のメギドの丘(Megiddo)での最終戦争は『黙示録』の16章16節に記され、ここで数字の16が2つ並ぶのも奇怪である。なお、聖書は全部で66書(1,189章)で編纂されている〔旧約が39書(929章)、新約が27書(260章)〕。また、ユダヤ教の戒律は613種あったとされるが、この諸々の戒律が新約では不完全なものとした。

また数「12」も聖書での象徴的(symbolic)なもので、これはイスラエルの12部族からで各々の部族が12,000人とされ $12,000 \times 12 = 144,000$ でイスラエルの民は144,000人であったと記される〔『黙示録』7章4-8節〕。さらに次を見てみる。

今日一般にクリスマス(Xmas)が12月25日のJesus Christ(イエス=キリスト)の誕生日を祝うものと解されているが、これは大きな誤解である。実は聖書にはクリスマスが12月25日とはどこにも記されていないのである。クリスマスが12月25日と定められたのはずっと後のことで、これが史実である。

このあたりとの関わり?から旧約の prophet(預言者)のJeremiah(エレミア)によるJeremiah『エレミヤ書』の記述を見てみる。

- 7) And in the thirty-seventh year after Jehoiachin, *king* of Judah, had been taken prisoner, in the twelfth month, on the twenty-fifth day of the month, Evil-merodach, *king* of Babylon, in the first year after he became *king*, took Jehoiachin, *king* of Judah, out of prison.... And his prison clothing was changed, and he was a *guest* at the *king's* table every day for the rest of his *life*. And for his food, the *king* gave him a regular amount every day till the day of his death, for the rest of his *life*. (Jeremiah 52 : 31, 33, 34)

すなわち、Babylonian Captivity(バビロン捕囚)で捕らわれの身となっていたユダヤ王 King Jehoiachin がバビロン王 Evil-merodach (Nebuchadnezzar 王の息子)の命(めい)で釈放され(560 B.C.)、その日が(下線で示したが)第12番目の月の25番目の日(12月25日)であったと記される。この日以来、Jehoiachin〔後の新約での神話的 Jesus(イエス)の祖先?ということにもなるが〕は囚人服を脱ぎ、牢獄から出され、生涯(till the day of his death)に渡り日々の食事もバビロン王と共に食卓を囲み客扱いで歓待されることとなった。

これはユダヤ民族にとって衣食住(food, clothing and living)が満たされることとなったバビロン捕囚の終焉の日を祝う象徴的な記述である。これを祝った12月25日が後にキリストの誕生を祝福するクリスマスの日となったのか?

一方で、ユダヤではこの冬至の期間にいくつも宗教的儀式が執り行われてもいて、夜の長い暗闇の日々が終わり明るい太陽の輝く日を願うことと関わり、12月25日が後にクリスマスとなったという解釈が知られてはいる。天文学(いわゆる当時の占星術)的に冬至がこのあたりの日である。英語での Merry Xmas! の merry の原義は「短いこと」で、「大いなる喜びの期間は短い」という語感がある〔なお、Merry Xmas! は Basic では Great Xmas! でよい〕。

バビロン捕囚はユダヤの民にとっては disaster(大災難・凶兆)であった。英語の disaster {dis (= away) + aster (= star)}は星の異変で起こるという考え方が背景にある。ユダヤの

民は紀元前 586 年のバビロン捕囚で神殿と土地と王を同時に失うこととなり、残ったものは唯一神(Yahweh)の言(Word of God)であった。

いずれにせよ今日、12月25日がクリスマスの祝日となっているが、New Testament (新約聖書)にはこの日が救世主 Jesus Christ (イエス=キリスト)の誕生した日であるとする記述は一切ない点には注目されねばならない。また、ユダヤ教と日本神道での儀式からすれば、やはり上述の過ぎ越しの祀り・バビロン捕囚終焉の日と日本の正月祀りでの一連の儀式には接点があるか？

なお、上の 6)で見た十戒は目に見える 2つの石板に刻まれた神の言(Word)であったが、これが目には見えない不可視の形で人間の心の中に投射(projection)され刻まれるのが後の新約での神の掟(the law of God)のテーマとその意味解釈となる。

## あとがき

本稿ではおよそ 1,400-430 B.C.に書かれたとされる旧約原本でのヘブライ語 (一部はアラム語)、また A.D. 40-90 あたりに書かれたと言われる新約原本でのギリシャ語に基づくわけではもちろんないが、特別に聖書言語の言語を意識した表題付けとした。

聖書言語には言霊(ことだま)が宿っている。神話と真話(史実)が交差し symbolism(象徴性)に富む旧約・新約聖書言語の真の hermeneutics (意味解釈法)は決して容易ではないが、本稿で焦点をあてた知る人ぞ知る theory of Japanese-Jewish common ancestry「日本・ユダヤ同祖論」の追究にはロマンがある。この理論はさらに一大スケールをもって展開するが、ここではそのサワリを示したにすぎない。さらなる追究はいわゆる cross-cultural communication (異文化間コミュニケーション)にも利するものがあると考えている。

comparative theology (比較神話学)の見地から今後はさらに数学的 structural linguistics (構造主義言語学)風の mytheme (神話素)への注目、また lexemes (語彙素)に基づく paradigmatic-syntagmatic relations (範列・統合関係)の見定めから大局的な聖書言語の word interpretation「語釈」が期待される。

一般の Basic からすれば、まさに全体系としての“Wider Basic”を見事に示すものが BBE ということになる。BBE は emotive representation (感情表示)に富む旧・新約全編も Basic への変換が可能であることを示すもので、biblical language (聖書言語)の釈義でこの BBE を範とすることは Basic プロパーでの研究のためにも特別な意義がある。なお、William Empson は I. A. Richards と親交のあったことで知られるが、Empson, W. (1988, p.230)は BBE での新約 St. Mark『マルコ福音書』の Basic 文を特別に高く評価している。

われわれが一般に目にする聖書の象徴言語(symbolic language)は原典からの「翻訳」

言語であり、翻訳の問題を考える上でも聖書言語への注目には特別な意味がある。もちろん Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* (1923) は翻訳言語の意味解釈の問題にも注視している。「意味の意味」(the meaning of meaning) という Ogden-Richards の見方に対し、米国の Blocker, G. は「無意味の意味」を考え *The Meaning of Meaninglessness* (1974) を著し意味の在り方を「世界の projection (射影・投射) とその解釈」と見た。意味の問題解釈で大いに注目に値する。Blocker は言語哲学から、さらに神道 (Shintoism) と禅仏教 (Zen Buddhism) を合わせた日本の神仏習合 (religious syncretism) の思想文化 (thought culture) にも造詣の深い学者であった。

なお、本会 *Newsletter* (東支部用) での拙稿でも示唆したように BBE の任意の節を自分で日本語に翻訳し、再度原文の Basic へと復元することで対比・対照する「復文式和文 Basic 訳」は Basic を真にものにしていく上でも有益となろう。いずれにせよ、BBE で示される Basic テキスト文への注目なしに体系 (system) としての Basic 言語の理解はあり得ない。

## 参考文献

BBE (1949) : *The Bible in Basic English*. Cambridge Univ. Press.

Blocker, G. (1974) *The Meaning of Meaninglessness*. Martinus Nijhoff, The Hague.

Eidelberg, J. (1980) *The Japanese and the Ten Lost Tribes of Israel*. 中川一夫 (訳) 『大和民族はユダヤ人だった』たま出版

Empson, W. (1988) *Argufying : Essays on Literature and Culture*. (Edited and Introduced by John Haffenden), The Hogarth Press, London.

後藤 寛 (2016) 『必携 最小限の語彙力で英語を読み、聴く方法：基礎語からの類推』  
(*Getting the Root Sense of the Basic Words of English*) 松柏社

鹿島 昇 (1985) 『日本神道の謎』光文社

小谷部全一郎 (1929) 『日本及日本国民之起源』(*Japan and the Roots of Japanese*)、(改編版) 『古代日本健国の深層 日本人のルーツはユダヤ人だ』(1991) たま出版

Ogden, C.K. and Richards, I. A. (1923) [10th edition 1952] *The Meaning of Meaning : A Study of the Influence of Language upon Thought and of the Science of Symbolism*. Routledge & Kegan Paul LTD, London.

Tokayer, M. (1975) 箱崎総一 (訳) 『ユダヤと日本 謎の古代史』産能大学出版部



## Basic English と身体

相沢佳子

私たちは日本語でも驚いた時には「目が飛び出す」とか「肝を冷やす」、怒った時は「血がのぼる」、「はらわたが煮えたる」などと言う。また悲しい時は「胸が張り裂ける」、恐怖の時は「身の毛もよだつ」、不安の時は「冷や汗をかく」、「手に汗を握る」などと。つまり体の部位を使って感情を表している。日常の様々な生活場面でも「手伝い、人手不足、手入れがよい、頭が固い、頭が上がらない、間髪を入れず、後ろ髪をひかれる、赤面、面の皮が厚い、顔色をうかがう、顔をつぶす、一目置く、うの目たかの目、額にしわ寄せ、浮き脚立つ」などなど。これらはすべて比喩表現であるが、身体部位は私たちに一番身近であるのでなじみやすい。つまり私たちは普段気付いてはいないが、身体部位を表すことばは比喩的に日常の様々な表現に実によく使われている。

英語でも同じように身体部位で心的状態などが表現されている。an eye for an eye (目には目を、同等の報復), critical eye (批判的見方), eye-opener (驚くべきニュースなど), change the face of ... (一変させる), have the face to do (ずうずうしく...する), change hands (持ち主が変わる), off hand (その場で、即座に), with a high hand (尊大、高飛車に), keep one's head (困難に直面しても冷静でいる), make head (前進する、抵抗する), with one's head in the air (いばって)など。

以上比喩、メタファーを取り上げてきたが、ことばそのものも身体とはきわめて密接にかかわっている。もともとことばは人の体、手や目で示す行為や物の世界を表す道具と言える。長い間西洋哲学では意味や理性など抽象的な事柄の説明、理解に人の経験や身体は考えられていなかった。そのような抽象的、客観的な意味を扱っていた従来の考え方に対して 20 世紀後半に現れた認知言語学ではことばは人間とは切り離せず、人の身体的経験に由来し、それとの関係で意味を生み出すとして想像力の主要な働きが唱えられるようになった。そして人の心の働きから生じる概念、ことばもなぞらえ(比喩)の原理によって構築されると

Lakoff & Johnson: *Metaphors We Live By* (1980)<sup>1</sup> は認知意味論の礎を築き、私たちの使っていることばを全く新しい視点からとらえた。比喩は単なる修辭的な言語使用にとどまらず、私たちの概念、思考の体系を形作ると主張した。そして人の身体化された経験から生まれる想像力と物事の理解の構想に着目した。人の身体を使っての経験が最も基本的なもので、それら具体的レベルでも経験を通じて比喩的に抽象世界にまで概念体系が広がると。私たちの概念構造そのものが本質的にメタファーだと結論づけた。例えば方向メタファーでは、Happy is up, sad is down. Good is up, bad is down, More is up, less is down. など身体的空間の上下と感情的、心理的経験が共存することなどをあげている。

その共著者の一人 Johnson は *The Body in Mind* (1990)<sup>2</sup> で上にあげた共著での研究

を展開している。それまでの客観主義では外界の事物を人の理解とは別個に考え、身体を使つての認識は主観的要素だと避けていた。抽象的な事柄の理解に我々の身体は何の役割もしないと、肉体から具現化した経験や考えは無視されていた。それに対し、私たちの身体を動かしての経験がいかに抽象的意味や推論にとって重要であるかを述べている。意味や理解、合理性などの説明はその中心的な場を私たちの世界を把握する理解の具現化、想像的創造に中心的役割を与えるべきだと主張している。バランス、量、力など私たちの身体的経験を土台にして抽象的概念を具現化しようとする、これこそがメタファーだと。

『ことばと身体』<sup>3</sup>の中で尾ヶ崎は「私たちの概念体系はなぞらえ(比喩)の原理によって構築される」と言う。特に幼児は身体によって世界を分節し、そこから切り出された経験の型が概念になると。ことばはもう一つの皮膚(感じる)、脳(考える)、手(伝える)で、見えないものを掴み動かすのだと。彼は身体性への関心は比喩の性質についての研究から生まれたと言っている。人は比喩の背景にある身体性で世界を理解する、ことばは外の情報を伝え、読み手は身体の間としてそれを体で納得すると。

菅原和孝も『ことばと身体 言語の手前の「人類学」』<sup>4</sup>の中で、身体行動が言語とその他の主要な性質として手話からヒントを得ている。サイン言語の手、顔、頭、胴体などは直接的に言語要素を反映している。視覚的に知覚される身体的信号を人の言語の理解に含めることを主張している。私たちが会話をしている時自分の身体に触ったり、身振りをしたり、身体丸ごと使ったコミュニケーションが繰り返されていると。

私自身も自分の二人の子供たちのことばの発達を常時メモし、「幼児のコトバの発達」<sup>5</sup>という論文を書いた。実際に幼児がことばを発する時、またはその前に自分の身体の部位を触ったりすることが多かった。確かにことばと身体とは一般的に結びついている。

そしてこの事実は上で見てきたように 20 世紀後半に比喩への関心などがかかわって唱えられ始めたのである。心理学者 Jerome Bruner は教育心理学で状況を探るのに 1)筋肉を使って行動する、2)イメージとして描く、3)ことばを使うという3つのモードの認知発達が大切だと考えていた。I. A. Richards<sup>6</sup> もこれをしばしば引用して、語学教育にも身体的動作、視覚イメージの大切さを説いた。さらに Lakoff & Johnson の本が出る 50 年も前に比喩についても初めて大きな光を当てたのも Richards である。彼は *philosophy of Rhetoric* (1936)<sup>7</sup>で語そのものには本来の意味作用はない、語の意味は固定したものでなく、広い意味での文脈に依存すると。。ことばは本質的にメタファー的であり、メタファーは思考そのもの、思想の相互作用、脈絡間の取引だと。

1929年、Johnsonらの考えが発表される半世紀以上も前に発表された Basic English (以下 Basic と略す) にとってもこの身体性はすでにきわめて深くかかわっている。Ogden 自身の考えの根本はことばとは私たちが感知できる具体的な物の世界を表す道具だということだった。どんなことばの意味も人の身体の動き、手指を使つての操作、そして実際には存在しない

fictionもその比喩、メタファーとして解釈されると。ことばが人の身体とかかわっているのは今まで見てきたようにどの言語でも共通だが、Basic ではこの特質がさらに推し進められ、身体という視点からことばがとらえられている。つまり Basic は身体を基盤として成り立ち、身体、五感を通して習得することばと言える。Basic で実際にどうことばと身体が深くかかわっているのだろうか。

私たちの身体は上で述べたように空間的指示の体系を提供しているだけでなく、最も明瞭なよく発達したスキーマーとして比喩的意味の拡大にも豊かな資源となっている。特に Basic では語彙が極めて限られているので比喩、メタファーの働きが大きい。そこで Basic では多くのことばの意味が私たちの身体の動き、手指での操作及びそのメタファーとして解釈される。つまり Basic は身体を基盤として成り立ち、身体や五感を通して習得することば、まさに basic な言語体系なのだ。

実際に Basic がどのように身体とかかわっているかを見ていこう。先ず語彙から、ご存じのように Basic の4つの語群について。先ず身体や手を使っての動作のことば(動作語)、物でも抽象的事象でも指し示すことば(名詞)、これは指す手指や目の代用となる。それらの性質や感情、私たちの態度を表すことば(形容詞)。動作の方向や位置を示すことば(方位詞)である。この空間の方向位置の認識も自分の身体を起点として明らかになる。

### (1) 動詞

わずかに 16 語の動詞の中で基本的な動作語が 10 語ある。come, go, put, take, give, get, make, keep, let, send である。これらは key act, いずれも人が自分の身体を動かしてする動作、誰でも一番よく知っている日常の単純な身体、手指の動作である。これらに比べればどんなことも不確実と言えよう。このような筋肉の調節運動こそ最も確実なものなのだ。そして Basic の叙述部のほとんどはこのような一握りの基本動作語が中心となっている。私たちの肉體行為という言語の根底にまで達することばという意味でも Basic はまさに basic である。say, see も体の一部、口と目を使っての動作である。つまり Basic の動詞がいかに関連づいたものか分かる。これは極めて顕著な特徴である。その他 seem では動作は表さないが推測する働きをもつ。助動詞としても使われる 3 語、be は存在、語と語の結びつきを、have は所有を、do は動作全般を表す。

勿論これらほんのわずかな動詞の root sense 根本的意味だけでは表現はひどく限られてしまう。Basic ではこのわずかな動詞も他の語との結合により豊かに、また比喩メタファーによって大きく意味が広がっている。先ずご存じのように動詞は方位詞や名詞などと結合して幅広く使われる。これは逆に言えば一般の数多くの non-Basic 動詞は分解して Basic に表される。少し例をみてみよう。以後 non-Basic words は斜体表記。

+ adv. *dash* = go quickly, *grab* = take roughly, *pass* = go by, *remove* = take away

+ noun *ask* = put a question, *assess* = put a value on, *breathe* = take a breath,

+ adj. *clarify* = make clear, *correct* = put right, *prepare* = get ready

+ pp. *appear* = come into view, *forget* = put...out of mind, *kill* = put to death

形容詞など他の品詞でも同じことが言える *irrelevant* (見当違い) = off the point

メタファーによる意味の拡がりは大きい。代表的な動詞 come, go, get, put でいくつか例を見てみよう。

**[come と go]** 行ったり来たりという身体の空間異動から状態などの時間的移動へと。

Christmas is coming soon. The war came to the end. The news came to my ear.

We came to an agreement. The secret came out (秘密が漏れる). in the coming year ...

All went well. The pain has gone. Winter has gone. Everything has gone well.

The fire went out (消えた). Let's go into detail. go out of existence (消滅する)

**[get]** 物を実際に手に入れることからある事態、心理状態などを得る(になる)と。

get control / disease / help / reward / secret / support

物の移動から事態や状態の移動へ

get facts into one's head (頭に叩き込む), get over the disease / trouble (乗り越えるから克服する), The words got through her (届く)

**[put]** 物を空間内で実際に移動させることから状態の移動、変化へ(方位詞と共に)。

put the feeling / idea into words (ことばに表す), put heart into ... (熱中する),

put a limit on ... (制限する), put an end / a stop to the war, put thoughts together

(考えをまとめる), put a high value on ... (高く評価する), put work before play.

**[構文]**のメタファーとして give a cry, have a walk, make a discovery, take a breath など、この構文ではこれら4つの動詞は元の意味はほとんど薄れ、名詞が意味を担っている。give の例をあげる。

**[give]** 内から何かを発するという意味で。

give her a kiss / a blow / a quick look, give the door a kick / a push, give the key

a turn, give her pleasure / shock / trouble, give them an answer / help / an order

この構文では動作が名詞で表されるので give a little smile, have a good sleep, take a deep breath などと修飾語句が容易に付けられる。この用法は一般の英語でもよく見られるが、Basic では動詞の数が極端に少ないのでこの構文は極めてよく使われている。

## (2) 名詞

私たちの身体は最もはっきりしたスキーマーとして比喩的意味の拡大の豊かな資源となっている。

a) 先ず身体の一部を使ったメタファーの例をみてみよう、多くは形状、位置の類似からきている。

arm of a coat [machine, seat]

body of an airplane [car, fact, law] 最後の2例は「一連の」という意味

face of a building [card, clock, thing (外観)]

foot of the bed [mountain, line, page]

hand of a clock at first hand(直接に), on hand (手元に), take in hand(着手する)

head of a bed [line, page, pin, committee, school, town] 最後の3例は機能

leg of the table [machine, stocking, table, trousers]

mouth of a bottle [bag, river, vessel]

neck of a bottle [shirt, water (海峡)]

b) 物理的動き、特に身体的動作で抽象的状态や動作を表す例

Basic では動詞そのものはごく限られているが、名詞には動作を表すものが多い。

the news was a blow(打撃), driving one to ... (へ駆り立てる), get a grip of the news

(把握する), put a motion to the meeting (提案する), have a pull with ... (手蔓がある),

have push (やる気), make a slip(誤り), a slip of tongue (言い損ない),

a smash of business(倒産), be in touch with, twist of the words(曲解) ^

c) 身体とは関係ないが、具体物で抽象的なことを表す例を付け加えておく

birth of the new idea, branch/field of science(分野), writing with fire(情熱),

fruit of work(生果), enough room(余地), seeds of doubt(もと),

## (3) 形容詞 Qualities

私たちの五感という身体にかかわる身近な領域の感覚で他の感覚の表現に。

五感では低次感覚から高次感覚へ 触覚→味覚→視覚→嗅覚→聴覚

触覚 cold look, hard man/work/question/rain, rough man(粗野な)/weather/ word,

sharp/pain/fall(急下降)/turn, smooth way of talking, soft heart/touch/voice

味覚 acid look(気難しい), bitter experience/person, sweet girl/smile

視覚 black look(不機嫌な), bright boy/idea, clear idea, dark look(陰気な)

聴覚 quiet dress(地味な), quiet days (落ち着いた日々), loud color(派手な)

私たちに最もなじみのある身体部位がメタファーにもよく使われている例を見てきた。身体に基盤を置くメタファーによって抽象概念にまで意味は拡大する。blow, tired, pain, wound など本来身体的強打、身体の疲れ、痛みや傷なども精神的な打撃、精神的に厭きてくるとか心の痛み、傷などを表すのに使われる。これは一般的にもよく使われているが Basic では語数が少ないので知的、感情的な状態を表すのに身体の動作、状態表す語で表されることが非常に多い。例えば、be *impressed* の代わりに be moved/gripped/ touched など。心を動かされ、つかまれ、触れることは感動することになる。また *understand* の代わりに have a grip of が、何かを掴むことは把握、理解することになる。Non-Basic だが同じ意味の *grasp* も同様である。see も実は「見る」よりは「分かる」の意味で使われることの方が多い。

#### (4) 方位詞

空間内の位置や身体の移動の方向など表す前置詞や副詞も抽象事象の状態や移動の意味で用いられる。ことばが人の身体と密接にかかわり、人の身体は空間の位置を占め、動作は空間内移動を伴うことが多い。空間認識が身体を起点とし、非空間現実、状態も空間化されている。空間内の位置、方向などを示す前置詞などが比喩的に抽象的状态を表すことは何も Basic に限ったことではない。英語、言語そのもの特質でもある。ただ Basic はこの特質をさらに押し進めた形で、身体及びその動きの空間内の位置方向を元に組織されたことばと言えよう。身体動作及び空間内の動き、状態が比喩によって広く抽象領域に広がっていくことばと言える。少し例を見てみよう。

at at the corner/ the station/ on the top of the mountain. など拡がりのない一点から  
at peace/ play/ best/ war/ work などへ、活動や状態が地点のようにとらえられて。  
in in the room/ the station/ the space/ Tokyo など境界線で囲まれた空間内部に存在  
することから in comfort/ danger/debt(借金がる)/ doubt/ love/ motion/ pain(痛んで、  
苦しんで) / trouble などある心理状態にあることを示す。

その他さまざまな方位詞が空間関係の位置や方向から抽象的状态に使われている。

against the wall から against the change/rule へ、 keep back violent words(控える),  
the price comes down/goes up (値段が下がる、上がる), off one's balance, put off  
the meeting(延期する), the machine is out of order(故障), authority over us,  
through his help(おかげで), under their control, take up the question

以上 Basic の4つの語群それぞれいかに身体的空間認識から比喩的に抽象的状态などへ語が使われているか見てきた。人の身体は空間と密接にかかわっている。空間認識が身体を起点にし、非空間的現実、状態などもことばによって空間化されている。さらに Basic には

「対立」(opposition)という考えが大きく働いている。言語研究の歴史上も能動態/受動態、深層/表層、言語能力/言語運用など対立による 2 分法はいくらでも見られる。2 分法という概念は音、語、統語など各レベルで適応できるが、意味の分野で理論的にさまざまな語の組み合わせを分析してこの opposition を構成する関係を初めて明らかにしたのは Ogden である。彼は *Opposition*<sup>8</sup> という題名の本の中でこの対立の性質の分析及び理論は語彙削減、学習の便だけでなく、語の意味確定にも新しい取り組み方を提供すると述べている。

Basic で重要な要素となっている対立についても私たちの身体が深くかかわって基準になっていることが分かる。わずか 16 の動詞の中で 10 語、半分以上が対とされている。come/go, give/get, put/take, keep/let, be/seem と。形容詞では Qualities150 のうち 100 General の他に 50 Opposites としてわざわざ明記している。bent/straight, feeble/strong, loose/tight, rough/smooth, normal/strange, private/public など。対にしてみることで語の意味がはっきりする。方位詞(前置詞、副詞)も on/off, in/out, into/out of, over/under など。

空間の cut は身体そのものが重要な軸となってその両側が対立する。right /left はこの代表である。両腕を水平に伸ばせば、それに沿って一番はっきりする。同じように私たちの身体の前後の水平線で front/back, before/after, future/ past など対立する。また身体の上下に向かって垂直線で一つの連続体として up/down を、その scale の両端 top/bottom は人の頭と足で代表される。

最後にこの Basic という言語材料を生かした教材の英語教育法 GDM についても述べたい。Basic と身体性との深いかかわりから Basic 自体が身体、五感を通して習得することばである。GDM でも身体的動作、視覚イメージが重視されている。grading, sequence と並んで SEN-SITs が重視されている。つまり文とその文の使われる状況、具体的事物、絵、実際になされる動作などとの組み合わせを一緒に提示することだ。

I am here. You are there から始まって He is taking his hat off his head...と自分の身体を動かして英語を身につけていく。performance(身体、手指を使って実際にやる)、imagery(イメージ、絵として頭に入れる)、verbalization(ことばで表す)の3つのモードを総動員して体を動かし指さしたり、絵を見たり、しゃべったり、聞いたりと様々な感覚を使って英語を学んでいく素晴らしい教授法である。

注

(1) G. Lakoff and M. Johnson *Metaphors We Live By* (The univ. of Chicago Press. 1980)

(2) Mark Johnson *The Body in the Mind* (The univ. of Chicago Press 1987)

(3) 尾ヶ崎 琳『言葉と身体』勁草書房 1990

- (4) 菅原和考『ことばと身体 「言語の手前」の人類学』講談社新書 2010
- (5) 相沢佳子「幼児のコトバの発達」『言語生活』No223 筑摩書房 1970
- (6) I. A. Richards *Techniques in Language Control* (Newbury House 1974)
- (7) \_\_\_\_\_ *The Philosophy of Rhetoric* (Oxford univ. of Chicago 1936)
- (8) C. K. Ogden *Opposition* (Kegan Paul 1932)



東日本支部活動報告書(2022年9月～2023年8月)

■2022年

9月10日(土)月例会

- ・デモ: Book1 pp.110-111 [clear, which(rel.)] 加藤准子
- ・Basic English の勉強会

10月8日(土)月例会

- ・デモ: Book1 p.95 [air, breath] 高成仁奈子
- ・ Basic English の勉強会

11月5日(土)月例会

- ・デモ: Book1 p.59 [give a turn] 板橋和子
- ・トーク:「入試への民間製試験導入問題」中山滋樹

12月10日(土)月例会

- ・Book1 p.72 [rel. what] 黒瀬るみ
- ・トーク:「Basic を通して知るコトバの動き、英語の知識」相沢佳子

■2023年

1月21日(土)月例会

- ・デモ: Book1 pp.224-225 伴野温子
- ・トーク:「Hojoki の三角関係」新井等

2月19日(日)月例会／Basic Workshop

- ・デモ: Book2 p.16 [short for, a word, paper, writing, send~to~] 服部正子
- ・デモ: Basic Reading Book『Winter』 新井等

3月25日(土)月例会

- ・デモ: Book1 p.80 [do~with] 多羅深雪
- ・トーク:「フォニックスと絵本を活用した授業展開-小学生から大人まで-」新井恵子

4月22日(土)月例会／教師養成講座1回

1. 授業体験①: 最初から [here, there] まで 服部正子

2. GDM 理論 唐木田照代
3. 実際の授業動画の視聴と解説 黒瀬るみ

5月13日(土)月例会／教師養成講座2回

1. 英語以外の外国語体験 伴野温子
2. レクチャー2:「go までのテキストの流れと EP1全体の構成」 黒瀬るみ
3. 授業体験②:Book1 pp.27-28[go] 服部正子

5月28日(日)教師養成講座3回

1. 授業体験:will be 加藤准子
2. レクチャー:授業の組み立て方と準備 伴野温子
3. 授業準備:参加者の授業発表に向けてグループワーク

6月10日(土)月例会／教師養成講座4回

1. 授業体験:[rel.which] 高成仁奈子
2. 参加者の授業
3. 全体の振り返り

7月1日(土)月例会

・デモ:[see/sees, do not see/does not see] 竹野裕子

総会

・議題ごとの話し合いなど

7月8日(土)/7月9日(日)

発音ワークショップ

8月10.11日:GDM 授業力 up セミナー 邦和セミナープラザ

## 西日本支部活動報告(2022年9月~2023年8月)

### ■2022年

9月18日:月例会・総会 大阪市立生涯学習センター

- ・デモ what(rel.)(Book 1 p.72) 松川和子
- ・「1時間目の導入について」勉強会

10月16日:月例会 大阪市立生涯学習センター

- ・デモ when(Book 1 p.65) 上島光代

11月27日:対面/オンラインセミナー 大阪市立生涯学習センター

- ・デモ ①when(Book 1 p.65) 上島光代
- ・デモ ②仮定法(Book3 pp.38-39) 松川和子
- ・トーク 「GDM を公立中学校の英語の授業に取り入れるとどんな効果が期待できるか？」  
松浦克己

12月17日:月例会 京都北文化会館

- ・デモ when(conj.)(Book 1 p.72) 麻田暁枝
- ・『Graded Direct Method で英語の授業が変わる』  
pp.68-78 を読んで 感想・質問を語り合う会

### ■2023年

1月14日:月例会 大阪市立生涯学習センター

- ・デモ keep(Book 1 p.98) 松川和子
- ・『Graded Direct Method で英語の授業が変わる』  
pp.83-93 を読んで 感想・質問を語り合う会

2月19日:月例会 大阪市立生涯学習センター

- ・デモ part(Book 1 p.45) 河村有里子
- ・『Graded Direct Method で英語の授業が変わる』  
pp.97-101 を読んで 感想・質問を語り合う会

3月11日・12日:GDM 初級・中級セミナーin kyoto2023 京都テルサ

4月16日:月例会 大阪市立生涯学習センター

・デモ for(Book 1 p.97) 麻田暁枝

・「現在完了」について勉強会

5月28日:月例会 大阪市立生涯学習センター

・デモ with(Book 1 p.37) 松川和子

『Graded Direct Method で英語の授業が変わる』

pp.101-130【前置詞 for/動名詞(1)finish...ing(2)動名詞が主語になる文】を読んで 感想・質問を語り合う会

6月25日:月例会 大阪市立生涯学習センター

・デモ have (Book 1 p.42) 上島光代

・『Graded Direct Method で英語の授業が変わる』

pp.135-144(不定詞:副詞的用法・名詞的用法・形容詞的用法)  
を読んで 感想・質問を語り合う会

7月16日:総会・月例会 大阪市立生涯学習センター

・デモ give (Book1 p19) 河村有里子

8月10.11日:GDM 授業力 up セミナー 邦和セミナープラザ